

# 語り合う文学教育の会

2013年度 No.4 6月9日・文責 橋本博孝

北海道の鈴木さんと神奈川の青木さんからおたより

奈良例会・入澤さんの実践報告「すみれとあり」

三重例会・原田さんの実践報告「初雪のふる日」

これからの予定（例会・日文協国語教育部会・夏期合宿研）

## 会員のみなさんから

### ☆鈴木岩夫さん(北海道)☆

新学期がスタートし、はや一ヶ月が過ぎました。忙しい毎日をお過ごしのことと察します。それでも、学校には、不安とともに夢や希望があふれんばかりにあるのも確かではないでしょうか。

自給自足の生活をめざして六年目の私の生活も同じです。今年は、100年に一度という低温と長雨という厳しい春を迎えております。それでも少し気温が上がると、一気にやる気がわいてきて、野良仕事に精が出ます。もうじき桜も咲くでしょう。

鈴木さんは、教職を退かれてからは北海道の石狩郡で農業をされています。このお葉書は5月10日にいただきました。

### ☆青木照明さん(神奈川)☆

11号を読ませていただきました。今回は、一つの方向で皆さんのお考えがまとまって見えてくるものがありましたので、それを感じるままに書いてみたいと思います。

庄司さんが最後に言われていた「作品の何と出会わせるのか、というところが大きい課題として残っている」ということについてですが、私は、田中実の〈第三項〉＝神と出会わせるのがよいのではないかと考えています。それによって原田さんが言われている「文学の本質を掴み」「子どもの発する言葉の価値が見える」ようになると考えてい

るからです。

既にそのことが 11 号の中にちりばめられているのではないのでしょうか。

「海の命」の「この海の守り神」。

庄司さんの「松井さんの目の前にまるで現実であるかのように表れる非現実的世界」

「幸運をよんだ夏みかん」。

「一つの花」の「奇跡で咲いた魔法の花」「お守り」

「やまなし」の「仏の慈悲に包まれている世界」「月の光をたくさん吸収しているやまなし」

等々ですが、まだまだあふれています。

これらのことが、すべて藤原先生の読みと通底しているのではないかと考えています。そして、藤原先生の世界を、もっともっと目指して歩んでいきたいと思っています。

青木さんにはいつもていねいなご批評をいただきます。はげみになります、ありがとうございます。

会員のみなさん、この会報をみなさんの交流の場にしたいと願っています。ハガキ、メール、そのほかの方法でも構いませんので、ぜひ近況などをお知らせください。国語教育以外の話題も大歓迎です。

## クラスの子どもたちとつくる「すみれとあり」

### 入澤佳菜さんの実践報告

奈良例会(5月11日)8名参加

このクラスは、入澤さんが昨年度担任していた6年生の学級が、お兄さんお姉さん学級としてかかわっていた1年生が進級した2年生です。

このクラスに、個別の教育が必要な雅くんがいます。雅くんは、一年生の時にはひらがなの読み書きも十分ではなく、一斉授業では学びにくい子でした。クラスの仲間ともよくぶつかりました。

その雅くんと相棒(6年生と1年生のペア)だったのが、そのころの6年入澤学級の智くんです。

智くんは、卒業式の日雅くんに手紙を渡していました。手紙渡しは、相棒間ではよくあることなので、智くんは入澤さんにわざわざ告げることはありませんでした。だから、入澤さんは手紙の内容は全く知りませんでした。これは、2年生として担任した雅くんのお母さんに、家庭訪問の時見せてもらったものです。

まさしは、ほかの人とちがうところがあるかもしれない。これから、そのちがいがでてくるかもしれない。わかってくるかもしれない。でも、そのときはあせらなくてもいいんです。だれかになんといわれても、そのことばでもっとじぶんをきずつけなくてもいいんです。

そして、たとえじぶんのいやなことをいわれたとしても、まさしはあいてもきずつけなくてほしいとおもいます。まさしがあいてにきずつけることばをいって、どっちもどっちのおたがいさまやからなかなおりをしようとなっても、ぼくは、このなかなおりがほんとうにいいなかなおりだとはおもいません。このなかなおりだと、どっちもはんせいしていません。だから、このなかなおりのしかただと、あいてもまさしも、また人をきずつけてしまいます。

だから、まさしはあいてをゆるすというなかなおりをしてほしい。おたがいさまでなかなおりだと、こころにきずができます。いくら、じぶんではこころのきずなんてなくなったとおもっても、こころのきずはそうかんたんにはきえませんが、また、なにかいやなことをいわれたとき、そのときできたこころのきずが、もっとふかくなっていきます。

だから、あいてをゆるすというなかなおりをしてほしい。あいては、いったことをはんせいして、まさしにもしわるいところがあったら、まさしもそれをはんせいする。そして、あいてをゆるす。

もし、あいてをきずつけてからゆるしても、こころのきずはきえないとおもいます。だから、まさしには、あいてをゆるしてほしい。ゆるすということが、まさしのせいちょうにもつながってくるとおもいます。

まさしが、このてがみをよんだとき、むずかしいとおもったかもしれない。わからなかったかもしれない。でも、まさしがせいちょうしてこのてがみのいみがわかるとおもったら、このてがみをよんでほしい。(このてがみのいみがわかるなら、それでいい)

雅くんあてですが、智くんが自分に言い聞かせているように感じます。

小学校6年生を終える時点でこういう手紙を書ける智くんには、どれだけつらいことがあったんだろうと、わたし（橋本）は思いました。

昨年度の入澤さんのクラスには、清くんがいました。清くんは、はじめの頃は、授業に参加できず、大きな声を出したり、友だちにかまいかけたり、ベランダに出て水遊びをしたりなどの行動を続けていました。暴れることも多かったようです。「くそばばあ」「入澤死ね」と言って、いろんな物を投げたり、蹴ったり、入澤さんをたたいたりしました。

そういう清くんを交えた学級づくりは、子どもたちにとっても、いやなこともあった試行錯誤の連続だったことでしょう。その学級での2年間の経験が、智くんのこの手紙につながっているのだと思います。

また、入澤さんに聞くと、智くんには特別支援学級に通う年上の兄弟がいて、智くんは、その兄弟もその事実も受け入れられずに苦しんだ時期があったとのこと。今も、つづいているんでしょうね。

雅くんは、智くんがひらがなで書いたこの手紙が読めません。それで、読みたい、ひらがなの勉強をしたい、と思い、これまで通級指導を敬遠していた母親を動かし、この4月末からは国語などで取り出し指導を始めているそうです。もちろん入澤さんの助言があつてのことです。

そんなわけで、雅くんは学級の国語の授業は一緒ではありません。今回のとりくみにも顔を出しません。

「すみれとあり」の授業は、子どもたちが疑問に思ったことを「名探偵2年3組」になって解き明かしていくという方法で進みました。

はじめの感想です。

#### ★そうくん★

ぼくは、はじめてしたこと。がけとか、たかいところとかにさくのを、しらなかつたです。ありがたねをはこぶってすごいです。力もちなんですね。なんでありは白いのだけとって、すてるのでしょうか。

#### ★ゆうさん★

わたしは、はじめての話を聞いて、はじめどんな話かしらなかつたから、読んだらたのしかつたです。

説明文の読みは、まず説明されていることがらそのものが子どもたちをひきつけます。ふだん見ているはずなんだけど、こういうふうすみれを見ることはないですからね。

#### ★たまさん★

わたしは、なんでかたまりだけをたべたかわからなかつたけど、先生が2かい目に読んだときに、だんだんわかつてきました。先生が、さいしょの1かい読んだときは、めちゃくちゃわかりませんでした。けど、おちついてかんがえたら、わかつてうれしかつたし、すみれとありって、こうゆうふうなんだな一っもおもいました。

ていねいに読んだり、写真を見たりしたら、たまさんの言うとおりに、「すみれとありってこうゆうふうなんだなあ」と納得できます。説明文では、こういう実感を得てほしいものです。

でも、

#### ★はるくん★

ぼくは、すこししかすみれはすみれのたねをとばせないんだなあ～。すみれとありは、パートナーみたい。なんで、とおくまでもって行って、なかまをつくらないといけないんだろう。とおくまで、 たねがいったら、なかまにならない。

この疑問は、「すみれとあり」では解き明かされません。先生がお話すればいいし、生活科でタンポポやヒマワリを教材化するときに考えさせてもいいですね。

国語の授業では、説明されている内容をしっかりつかみ、いろんな思いを交流することができます。学んだことで、実際に自然を見る目の質も変わるはずですよ。

それとともに、どのように説明されているのかにも目を向けさせる必要があると考えます。「すみれとあり」（教育出版2年上）は、教育出版教科書の説明文教材の排列の中で、次のような位置をしめています。

#### ◇説明内容では◇

ここまで一つのことについての説明（例えば「はたらくじどうしゃ」ならバスについての説明）だったが、はじめて関係を説明している。

#### ◇叙述（説明の仕方）では（カギになっている言葉をゴシックで示します）◇

★1年上「なにがかくれているのでしょうか」

「だれが たべたのでしょうか」

ともに、問いがはじめに提示され、解がすぐ続く。写真で説明。

★1年下「はたらくじどうしゃ」

自動車の機能（目的）→**ですから**→仕組み（構造）

★1年下「みぶりでつたえる」

みぶりの具体例→**このように（な）**→みぶりの役割の概括的説明

#### ☆2年上「すみれとあり」☆

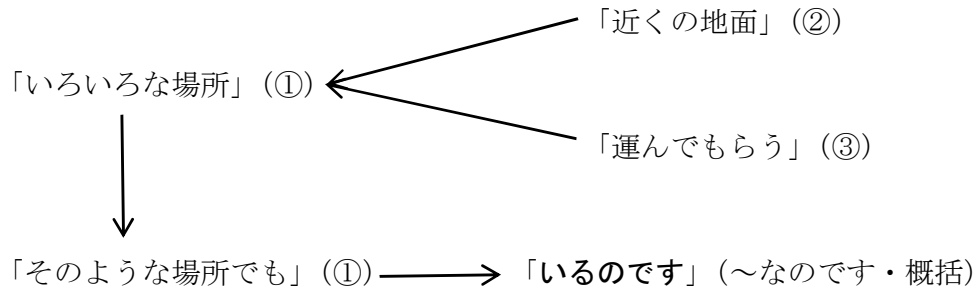
初めて段落の相互関係が課題になる。全体は4つの段落。

①問題提起「**こんな場所に（も）**」

②すみれの種の説明「近くの地面」

③ありの行動の説明「運んでいく」

④ここまでの説明を関連づけて解を示す（①～③はここまでの段落番号）



教科書をお持ちの方は、教材文を参照しながら確かめてください。

子どもたちにも、2年生になったからちょっと難しい説明文だけどしっかり読めたね、とそれなりに系統を意識させようとは、藤原先生の何年か前の指摘です。

入澤さん、職場でも中心的な仕事をだんだん担うようになる今年、がんばってください。忙しいところご苦労さまでした。

三重例会 5月25日

原田聡子さん「初雪のふる日」(光村4年下)

8名参加

原田さんの実践報告です。「初雪のふる日」は、安房直子さんの作品で、光村の4年生最後の教材です。これまで語り合う会では話し合ったことがありません。それで、教材の見方を中心に論議しました。

原田さんは、これまでの語り合う会の教材研究の原則的な立場で分析を試みました。でも、たとえば主人公の女の子の人物像は少しも明確になってきません、どうしたもの

かと困っておられました。

藤原先生は、主としてリアリズムの手法によって書かれた物語の分析研究の方法を、このようなファンタジー作品に適用しようとするところに無理が生じると言われました。ファンタジーは、具体的なできごとのつながりを見るのではなく、イメージがどのように連鎖しているのかを見るのが大切なのではないかと指摘です。示されたのは、例えば…。

女の子は、村から、もみの森、こおった湖、谷間の村、小さな町、大きな町、そして最後の町まで、ずいぶん遠くまで通り過ぎてゆきます。この空間的距離は、実は冬の初めから真冬、そして春への時間的距離と重ねあわされているのではないかと。それを導いているのは白です。うさぎの白、雪の白、よもぎの葉裏の白。また雪は、冬の訪れを告げ、世界を冬に塗りこめていきますが、同時に春を準備しています。

藤原先生の示唆を受け、イメージの連鎖という観点で、もう一度じっくり読みなおしたい作品でした。

今回は、紙数の関係で、原田さんのとりくみを紹介できずの申し訳ありません。

★三重民教連集会（6月2日）の国語分科会はわたし（橋本）が担当しました。9名の参加がありました。来てくださったみなさん、ありがとうございました。

## これからの例会（前回のお知らせから一部変更しました）

☆6月16日（土）奈良例会 午後2時半～ 奈良教育大学附属小学校

織田萌子さんの実践報告「生き物はつながりの中に」

☆6月22日（土）三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部1号館4階ゼミ室

庄司たづ子さんの実践報告「スーホの白い馬」



☆7月 6日(土) 三重例会 午後2時半～ 三重大学教育学部1号館4階ゼミ室  
中西祐司さんの実践報告「『鳥獣戯画』を読む」

★8月10日(土)・11日(日) 日本文学協会国語教育部会夏期研究集会  
法政大学市ヶ谷キャンパス(東京) —〈第三項〉と〈語り〉—  
中西祐司さんが実践報告「生きる」をします。詳しくは橋本まで。

☆8月17日(土) 18日(日) 語り合う会夏期合宿  
三重志摩市阿児アリーナ 今から予定しておいてくださいね